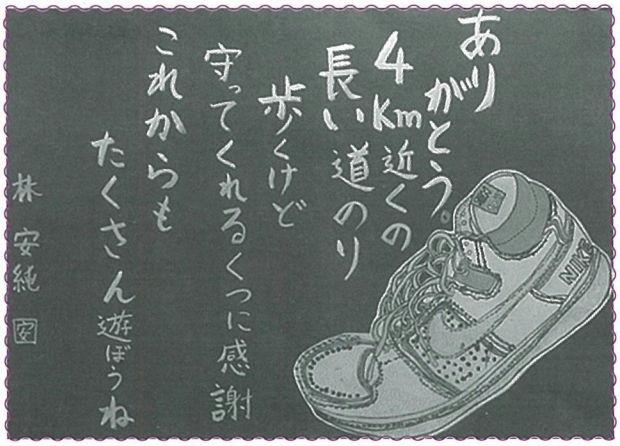
恵那市教育研究所
平成26年11月28日

えな

〒509-7292
恵那市長島町正家一丁目1番地1
恵那市役所西庁舎4階
TEL (0573) 26-2111　FAX (0573) 26-2189
http://www.ena-gif.ed.jp/



「わたしのくつ」

大井第二小学校　5年生　林　　安　純

平成26年度
恵那市読書感想文コンクール
読書感想文集

巻頭言

本との出会い・人との出会い

恵那市読書感想文
審査委員長
恵那市立岩邑小学校
校長　足立　篤美

皆さんは、どんな本との出会いをしていますか。『かあちゃん取扱説明書』。こんな題名の本だと思わず読んでみたくなります。小学校の中・高学年の読書感想文審査作品に三点ありました。この本を読んだ大井小学校三年生遠山萌桃さんは、作品の最後の一行を、「今から、自分の部屋をかたづけてこよっと。」と結んでいます。『かあちゃん取扱説明書』が実は、『自分取扱説明書』になったんですね。本に出会い、本から自分の中の何かを揺り動かされる瞬間のなんと尊いことでしょう。題名の持つ力は大きいです。手にとって読んでもらえるかどうかをかけた大勝負の言葉。ママでも、お母さんでも、おふくろでもなく『かあちゃん』＋『取扱説明書』という甘えたい、でも、ちょっと背伸びしたい年頃を引きつけます。言葉のニュアンスが心をほっとさせ温かくしてくれます。

今年度もたくさんの子どもたちがすてきな本との出会いを読書感想文にまとめてくれました。小学校では、二三七〇作品。中学校で、一四五六作品。合わせて、三八二六作品にもなりました。

選書の理由と感想文にまとめた思いは、小学校の低学年では周りの人の薦めや身の周りの自然や虫たち。中学年になると岩邑小学校四年生の鈴木義人君のように本屋さんでお薦めの本を聞いて選んだり、自分の興味のあることに向かったりし、高学年になると世界の文化の違いへの驚きや社会的な視野で選び始めています。中学生になると現代という社会に目を向け、話題の作品や深い問題意識を持った目を感じさせられます。物語のストーリーや自然界の事実・法則性に惹かれるところから、自分自身の経験と響き合う思いを育て始める読書の魅力が発達段階に応じて伝わってきます。

飯地小学校一年生舘林燈代蔵君は『忘れても好きだよ　おばあちゃん』を読んで「ぼくのひいおばあちゃんもおもいでのはっぱが、一まい一まいちって、ぼくのなまえをわすれてしまったのかな」と悲しい現実をたとえの表現を通して理解しようとしています。

三郷小学校四年生工藤海桜さんは『あの日と同じ空』という戦争をテーマにした作品の「おまえたちは、空に美しいものを見せてやってくれ。」と伝えるお年寄りの思いに深く感動しています。言葉の世界から深く強く心を育てたすてきな恵那市の子どもたち。

今年度は、恵那市の図書館教育にとって、大きな節目の年になりました。岐阜県中の図書館教育に関わる先生方の研究大会開催市として、市長さんのご挨拶や、恵那市中央図書館の館長さんや司書の方が特設部会として実践を発表され、全県へ本市の取組を発信し、高い評価を得た年であり、「第二次子どもの読書活動推進計画」が策定された年でもあります。

学力の二極化＝読書生活の二極化が問われる今。今こうして子どもたちの読書活動を通して未来を拓く取組をしていますが、言い換えれば私たち大人の未来を託す取組でもあります。

中学校三年生でも読み聞かせは大好きです。横を向いているようで実は聞いているものです。読まない子には読んであげればいいし、「言葉」が「心」に響く授業や実生活の場面を生かしたいものです。

本と関わる力は、人と関わる力といっても過言ではないと思います。ふと目にふれた本の題名に心惹かれる感性は、周りの人の喜びや悲しみを思いやる感性でもあります。社会や自然の出来事に好奇心を持って関わろうとする意欲は、何が起こるかわからないこれからの時代を自分の力で、自分たちの力で解決していこうとする意欲に他ならないでしょう。

本を読む楽しさを伝えることは、人とふれあって生きる楽しさを伝えることです。読書に関わる授業の場面や毎日のほんのわずかな時間の積み重ねを、子どもたちにとっても、私たちにとっても大切な時間にしたいものです。

恵那市読書感想文集目次

小学校　低学年の部

★「かみさまがくれたびょうき」
～わすれてもすきだよおばあちゃんをよんで～
飯地小学校　一年　舘林燈代蔵　2

★たねってふしぎ
東野小学校　一年　伊藤　温真　3

◆やっぱり、いえではつまらんなあ
恵那北小学校　一年　樋田　翔矢　3

◆おとうさん大好き
長島小学校　二年　安江満友菜　4

◇審査員講評　4

小学校　中学年の部

★ぼくもお兄ちゃんになりたいな
大井第二小学校　四年　林　吏久翔　4

★平和な空の下で
三郷小学校　四年　工藤　海桜　5

◆子ねこが教えてくれたこと
武並小学校　三年　安江　史笑　6

◆ゾウの森とポテトチップス
長島小学校　三年　杉下　聡吾　6

◇審査員講評　7

★優秀賞　◆優良賞

小学校　高学年の部

★「手で食べる?」文化から学んだこと
飯地小学校　五年　小澤　宙子　7

★『じげんと私の十の約束』
串原小学校　六年　安藤　帆乃　8

◆ぼくは、負けない
飯地小学校　六年　佐藤　辰樹　9

◆『カブトムシ山に帰る』を読んで
東野小学校　六年　山内　大悟　9

◇審査員講評　10

中学校の部

★幸せのかけら
恵那東中学校　二年　鈴木　映恵　10

★心の声
恵那北中学校　二年　小栗ほの花　11

◆介護の大変さ
恵那西中学校　二年　曽我　柚妃　12

◆ＪＡＬから学ぶ「利他の心」
恵那西中学校　三年　西尾ひより　13

◇審査員講評　13　14

小学校　低学年の部

★優秀賞

「かみさまがくれたびょうき」
～わすれてもすきだよおばあちゃんをよんで～

飯地小学校　一年　舘林燈代蔵

「おばあちゃん、どうしてぼくのなまえをよんでくれないの?」

ぼくには、みやざきにひいおばあちゃんがいます。なつやすみにあそびにいったとき、ひいおばあちゃんはぼくをみて

「よくきたね。よしよし。」

とだけいって、にこにこしていました。ぼくのなまえをしらないのかなとおもいおかあさんにきくと、

「ひいおばあちゃんは、かみさまがくれたびょうきなのよ。目にはみえないけど、いろいろわすれてしまうびょうきなんだよ。」

と、おしえてくれました。

「かみさまがくれたびょうき?」

とおどろいたけれど、この本をよんですぐにいみがわかりました。

女の子のおばあちゃんも、ぼくのひいおばあちゃんとおなじかみさまがくれたびょうきです。このびょうきは、むかしのことはおぼえていて、今いったことはすぐにわすれてしまいます。女の子のおかあさんは、

「おばあちゃんの今までって、大きな木みた

いなものね。びょうきでおばあちゃんのあたまにはあきがきて、木のはっぱが一まい一まいちっていったのね。」
とおしえてくれました。
ぼくのひいおばあちゃんも、おもいでのはっぱが一まい一まいちってぼくのなまえをわすれてしまったのかなとおもい、なんだかかなしいきもちになりました。
ぼくのなまえをわすれただけでなく、こんなこともありました。みんなでゆうごはんをたべたつぎの日、
「きのうは、ゆうごはんをなにもたべさせてもらえなかったのよ。」
と、おばさんにいっていました。おかあさんは、
「そうだった?それなら、きょうはしっかりたべましょうね。」
といっていました。ひいおばあちゃんのあたまのなかは、きのうのはっぱがすぐにちってしまったみたいです。でも、ぼくにとってはやさしいひいおばあちゃんです。これからものんびりすごして、春の木のようにあたらしいめをつけてほしいです。

★優秀賞

たねってふしぎ

東野小学校
一年　伊藤　温真

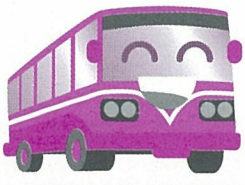
たねってふしぎだなあ。がっこうでまいたあさがおのたね。こゆびのつめよりもちいさくて、いしころみたいなくろいたね。めをだしたとおもったら、たくさんのはがついたつるがぐんぐんのびました。きれいなはなもまいにちさきます。ふしぎだなあ。あのちいさいたねのなかに、どうやってはいっていたのかな。ぎゅっとちぢこまっていたのかな。まるでたねのマジックみたいだとおもいました。
このほんでは、たまごのからをうえきばちにして、まめのたねをまいてじっけんしていました。まいにちひとつずつ、つちからまめをほりだしてみていくと、どうやってまめがそだっていくのかがわかるのです。たねがやぶれて、ねからでてくるところなんてみたことがありませんでした。はやつるやはなは、たねのなかにかくれていたんじゃなくて、つちとみずとたいようのひかりがあるとぐんぐんそだって、きれいなあさがおのはなをさかせるというひみつもしることができました。
ぼくのあさがおだってすごい。あさがおのつるとぼくでせいくらべをしたら、つるがかちました。はるにまいたたねが六さいのぼくよりおおきくなったなんて、ぐんぐんのびるスピードはほんとうにすごいです。おかあさんとたべたぶどうのたねは、ぜんぜんめがでなくて、もうだめかなとおもっていたら、つぎのとしのはるに、たくさんめがでてきてびっくりしました。おとうさんとまいたブロッコリースプラウトのたねは、三日でめをだしてまたびっくりしました。
たねってふしぎだなあ。ずっとつちのなかにいてゆっくりめをだすたねもあれば、すごくはやくめをだすのもある。あさがおのたねからはあさがおが、ぶどうのたねからはぶどうがちゃんとそだっています。はなもくだものもやさいも、どのたねもみんな、まちがえないでおおきくそだっていくからふしぎ。たねって、ほんとうにすごいな。

◆優良賞

やっぱり、いえではつまらんなあ

恵那北小学校
一年　樋田　翔矢

どこにいくのかな、このバス。「どこかいきのバス」なんてきいたことがない。そうおもってほんをひらいたけれど、よみはじめてすぐ、ぼくはびっくりした。だって、このほんの「ぼく」は、ほんとにぼくにそっくりなんだもの。
ぼくは、こうさくがすきで、とくに、しんぶんしやだんぼおるをつかって、いろいろなものをつくるのがだいすき。くるまやかたなやひこうき、いままでいろんなものをつくったよ。それはぼくのたからもの。でも、できたものをちょっとそのままおいておくと、おかあさんはすぐ
「しょうや、はやくかたづけて。」
という。ぼくは、せっかくじょうずにできたから、もうすこし、ここにおいてみていたいなあとおもう。そうしてぐずぐずしていると、いつのまにかすてられていたりする。そんなとき、ぼくは、とてもかなしくなって、へやのすみっこへいって、すねてなく。
ぼくはすねてなくことしかできんけど、ほんの「ぼく」は、ほんとにいえをでていってしまったから、ちょっとえらいとおもった。そして、「どこかいきのバス」にのったとき、いいなあとおもった。
どこかいきのバスは、どこへでもいけるバスだった。せんすいていにもなる。ひこうせんにもなる。それになにより、はなしができる。こだぬきがばけたバスだか



ら。こんなたのしいバスがきたら、ぼくだってのるよ。

でも、むじんとうでいわからおちたとき、「ぼく」はさみしくなったね。おしりをうっても、てのひらをすりむいても、しんぱいしてくれるひとがいないから。だから、いえにかえることにしたんだね。ぼくのおかあさんも、ぼくがけがをしたり、かぜをひいたりしたとき、やさしいよ。

やっぱり、いえではつまらんなあ。おかあさんやおとうさんやかぞくがいるいえのほうが、ずっとたのしいなあとおもったよ。

◆優良賞

おとうさん大好き

長島小学校
二年　安江満友菜

「さきちゃんのおかあさん、早く、いそいで。」

わたしは、本を読みながら何どもそう思って、むねがドキドキしました。おかあさんが、むねがくるしくてたおれている男の人をたすけるためにいろんなびょういんをまわっているところを読みながら、早くたすかってほしいなと思いました。

おうちでごはんもたべずにまっているさきちゃんのために「はやくかえってあげて。」と思いながら読みました。

まよなかにおかあさんがかえってきて、さきちゃんがいきなりとびついてわあわあないたときの気もちが、わたしはすごくよく分かります。なぜかというと、わたしもさきちゃんみたいな気もちになったことがあるからです。

わたしのおとうさんは会社のえらい人のうんてんしゅをしていました。いつもいそがしくていっしょにおとうさんといられないので、ごはんをたべるやくそくをしました。でも、ずっとたのしみにしていたのにまってもなかなかかえってこず、「やくそくわすれちゃったのかな。」とか、「何かあったのかな。」と思ってなみだが出てきたことがあります。さきちゃんもきっと、たん生会ができなくてかなしかったのと、おかあさんのことが大好きだからすごく心ぱいで、ずっとがまんしていた気もちが、おかあさんを見てほっとしてわあわあないてなみだがとまらなかったのだと思います。

まよなかだったけどたん生日会ができて、本当によかったなと思ったし、わたしもうれしかったです。

わたしのおとうさんもあの日きっと、さきちゃんのおかあさんのようにわたしのために早くいえにかえろうとしてがんばってくれたんだなと思って、うれしくなりました。わたしは、この本を読んでおとうさんのことがもっともっと大好きになりました。

◇講評◇

低学年の読書感想文は、本を読んだ感想だけでなく自分の生活や体験とつなげながら書かれ、また物語から科学的な読み物まで本の種類も幅広く、様々な視点からの感想文となっていました。

優秀賞『たねってふしぎ』は科学的な読み物の感想文です。アサガオが成長する喜びと、小さな種から芽や長い蔓が出てくる不思議を自分の言葉で素直に書かれています。ブドウやブロッコリースプラウトの種を育てる実践をし、本で得た知識を実生活へとつなげていく姿が印象的でした。

優秀賞『「かみさまがくれたびょうき」～わすれてもすきだよおばあちゃんをよんで～』では、祖母が認知症になるという、自分と主人公の共通した体験を比べながら、そこから感じた思いをまとめることができました。祖母の症状を木のようだと表現し、温かく見守る様子が描かれていました。

今回寄せられた作品は、本の内容とそれと関連する自分の体験を書いていく形の感想文が多くありました。しかし、どこまでが本の内容で、どこからが自分の体験か、見分けにくい文も見られました。本の内容と自分のエピソードとを書き分けると自分の考えが伝わりやすい感想文になると感じました。

小学校　中学年の部

★優秀賞

ぼくもお兄ちゃんになりたいな

大井第二小学校
四年　林　吏久翔

この本を読むきっかけは、ぼくも最近妹が生まれてお兄ちゃんになったので、自分とよくにているなと思ったからです。

ペーテルはずっと兄弟がほしかったから、妹ができて大よろこびでした。でも、お父さんもお母さんも赤ちゃんのお世話にかかりきりで、自分はなかなか相手にしてもらえなくておもしろくありませんでした。自分のかみの毛を切ったり、ティーポットをわったり、悪いことをするとお母さんがそばに来てくれるからうれしくなって、ペーテルはわざといたずらをしていました。

ぼくも妹が生まれたとき、ちいさくてかわいい

なと思って、とってもうれしかったです。でも、お母さんは、妹におっぱいを飲ませたり、おむつをかえたり、泣いたらだっこしてねかせたり、いつもいそがしくしていました。ぼくが話をしたり、何かをやってほしい時があっても、

「今おっぱいあげているから、あとでね。」

と言って、なかなかやってもらえません。夜もいっしょにねていたけど、妹がねる時間になるとねかせなきゃいけないので、弟と二人でねないといけません。妹ができてうれしかったけど、さみしいことがふえたので、妹がいないほうがよかったなと思ったことがありました。いなければもっとお母さんと話したり、遊んだりできるからです。

はじめ、ぼくはもう大きいからぼくの相手はしてくれないのかなと思っていました。でも、お母さんは、

「ゆあちゃんのめんどうを見なきゃいけないからりくと達の相手ができなくてごめんね。」

と言ってくれました。そして、妹がねている時に、話を聞いてくれたり、遊んでくれたりします。お母さんはぼくたちの事もちゃんと考えてくれていたんだと分かりました。

ペーテルもお母さんにだっこしてもらって

「ペーテルが大好きよ。」

と言ってもらえてすごく喜びました。それからお母さんに、

「赤ちゃんはまだ小さいから自分では何もできなくて、手がかかって大変なの。だからペーテルもお母さんを手伝ってね。」

と言われて、それからはお母さんのお手伝いで妹のお世話をしました。

ぼくもお母さんがいそがしい時に妹を遊んであげたり、ミルクをあげたり、泣いた時はだっこしてあげます。妹がうれしそうに笑うと、すごくうれしい気持ちになります。

「りくとがめんどうを見てくれるから助かったよ。」

とお母さんに言ってもらえたときは、もっともっとうれしくなります。もっと遊んであげたりだっこしたりしてあげようと思います。さみしい時もあるけどお母さんはぼくの事も大好きだし、いそがしくてたいへんだからがまんしようとおもいます。妹が生まれてきてくれて本当によかったです。ゆあが大きくなって、早くいっしょに遊びたいです。

★優秀賞

平和な空の下で

三郷小学校
四年　工藤　海桜

青くて大きな空、私はそんな空の下で、家族や友達がいて、食べ物も飲み物もあって幸せな生活をしています。

私が、幸せな生活や平和な今を大事にしていこうと思ったのは、「あの日と同じ空」という本を読んだからです。

この本は、主人公のダイキが沖縄のひいばあちゃんに会いに行ったことから始まります。

私は、沖縄に行ったことはありませんが、お母さんに写真を見せてもらいました。海はすきとおるように青く、ガジュマルの木はとても太く、ずっしりと大地に根をはっていて本当に美しく、沖縄の力強さに感動したことをおぼえています。

そんな沖縄で、ダイキがひいばあちゃんの話を聞いたり、沖縄のようかいのキジムナーと出会ったりすることで、戦争の大変さを知り、平和について考えていく物語です。

戦争で、お父さんをなくして、さらに戦いがはげしくなり、一人また一人と、家族がなくなりました。ついに、ひいばあちゃん一人になってしまいました。昔は、お父さんなど男の人は兵隊にならなければなりませんでした。

私は、お父さんが仕事でけがをしたと聞いたとき、とても心配になったことがあります。大きなけがだったらどうしようと不安になりました。帰ってくるまでの時間が長く感じました。帰ってきて、いたそうだったけど、顔を見て安心しました。

私は、お父さんが大好きです。家族が大好きです。だから、お父さんがいないなんて嫌です。戦争に見送るなんて絶対にできません。

家族みんなが一緒にすごしている今の生活から、家族がいなくなったことを想像するととてもこわくなりました。

とても大切な家族や、人間らしいたましいをもうばってしまう戦争は絶対にしてはいけないと思いました。

ひいばあちゃんが最後に言ったことで、「空はずいぶん、いろんなものを見たんだろうね。まっ茶色な焼け野原。消えていった、いくつもの命。おまえたちは、空に美しいものを見せてやってくれ。」という部分がとても心にのこりました。

「空に美しいものを見せる。」私だったら、家族と一緒に野球をして楽しんでいるところ、友達と協力して一輪車をしているところ、泣いたり、

笑ったりありのままの自分。家族や友達とすごす何気ない小さなことでもいい。そういうことをして、「人間は、美しい世界を作っているな。」と空に思わせるようにしたいです。そして、今の私たちが生きている時代はとても幸せだということを感じ、当たり前のことを当たり前と思わないで感謝をしたり、いつも平和と考えるのではなく、昔のことをもっと知って平和な今や、命を大事にしたりしていきたいです。

あの青くて大きな空に私はむねをはって、美しいものをたくさん見せていきたいです。

◆優良賞

子ねこが教えてくれたこと

武並小学校
三年　安江　史笑

「ほらね、また一つ、いいことがみつかった。」

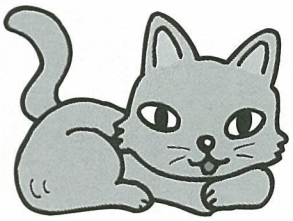
わたしは、子ねこの言うこの言葉が、とってもすきです。この子ねこは、ペットショップで売られているようなかわいい子ねことは全ぜんちがいます。やせっぽっちで、毛はボソボソ。しっぽは曲がっていて、声はガラガラです。ねこずきのわたしでも、この子ねこがかわいいなんて、とても思えませんでした。

でも、本を読みすすんでいくうちに、はじめのいんしょうがかわっていきました。子ねこのことが大すきになっていきました。わたしとちがって、子ねこはいつも前向きで、心がとてもきれいだったからです。

わたしは、学校でしっぱいしたり、まちがえてしまったりすると、すごく落ちこんで、なかなか立ち直れません。気分がしずんでしまい、次から次へといやなことばかり考えてしまいます。

でも、子ねこは、わたしと全くちがいます。どんなたいへんなことがおきても、その中にかならずいいことがあるとしんじています。そして、いいことを見つけて、「しあわせだ。」ってわらうのです。

わたしはびっくりしました。つらい時になみだを流すのは、とてもかんたんです。でもそのつらさをはんたいの気持ちに切りかえてしまうことなんて、わたしは今まで考えたことがありませんでした。だから、「どうして子ねこは前向きに生きていけるんだろう。」と、時間をかけて、じっくり考えてみました。



今年の夏休み、わたしは「てくてくのたび」というもよおしにさんかしました。「五十五キロをかん歩する！」という目ひょうをたてました。でも、ふだん歩きなれていないわたしには、一日目のお昼ごろから、つらくて、やめたい気もちでいっぱいになりました。家に帰りたくなってきました。

歩いている時、子ねこのことを思いだしました。「子ねこはすてられちゃったのに、よくわらっていられたね。今のわたしを見たら何と言うかな。」

わたしの横を歩いているみんなも、つらそうでした。その時、わたしは、子ねこのお母さんが言った言葉を思い出しました。

「気持ちだけは、いつも明日を見てるんだよ。」

子ねこは、この言葉をささえにして、わらっていたんじゃないかと思いました。

このたびで、「知らなかった子と友だちになれた。」「たくさん歩いた後のごはんは、すごくおいしい。」「いつもより歩けた。」など、よいことを見つけました。いやいや歩くのじゃなくて、歩くことを楽しむことにしました。わたしは、子ねこから、「うまくいかなくても、いやなことがあっても、その中に少しでもよい所をみつければいい。」と教えてもらいました。五十五キロかん歩できました。

わたしは、あれから毎日、いいことを見つけようと思ってすごしています。

子ねことお母さん、ありがとう。

◆優良賞

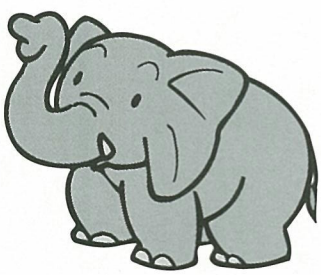
ゾウの森とポテトチップス

長島小学校
三年　杉下　聡吾

中央図書館で見つけた、この「ゾウの森とポテトチップス」という一さつの本。ゾウとポテトチップスって、いったいどういうかんけいがあるのかな。ふしぎに思い、ぼくは読んでみることにしました。

この本は、東京から南へおよそ四千キロの所にある、世界で三番目に大きくてあたたかい島、マレーシアのボルネオ島に住む、ゾウと人間の話です。

本には、何十頭ものゾウが写真でのっていました。川のまわりで水遊びやどろ遊びをするゾウの様子は、ぼくたちがふだん目にする小さな犬やネコと変わらず、とてもかわいいです。でも、前に動物園に行った時に、ゾウは思ったよりも体が大きくてびっくりしたことや、においがものすごくくさいこと、力がとても強いことを思い出し、そ



れが何十頭もいたら、大変だなと思いました。
ゾウが住むキナバタンガン川は、少し前まではねったい雨林にかこまれていたのに、今では、そのほとんどが人間の手で切りたおされ、アブラヤシの木のプランテーションという畑になってしまいました。たくさんのしゅるいのしょく物がないと生きていけない野生のゾウは、プランテーションではくらせません。それで、えさをもとめて、少しだけのこっている森をい動するために、人間の畑をあらしてしまったり、家をこわしてしまったりすることもあるそうです。動物園で見るゾウは、大きくてもおとなしそうだけど、自然に生きるためにゾウがそんなことをするなんておどろいたし、ボルネオの人も困っていると思いました。だけど、人間の畑や家をまもるために、とう油をかけられ、火をつけられひふがただれたゾウの背中を見た時は、とてもかわいそうで、どうしたらゾウと人間が仲よくくらすことができるかなぁと、考えてしまいました。ボルネオの人もゾウたちも、どちらもかわいそうです。どうしてアブラヤシをうえなくてはいけないのだろう。ぼくは、もっとふしぎになり、本を読んでいきました。
アブラヤシの実からは、「パーム油」という油がとれます。その油は、ぼくたちが住む日本で、色々な物に使われているそうです。たとえば、ぼくが大好きなポテトチップスやカップめん、マーガリンなどの食べ物。洗ざいやシャンプーでは、「体にやさしい」と言われるものの多くは、このパーム油で作られています。ぼくたちの生活は、森をけずられ住めなくなった動物や、ゾウのように少しの森の中で一生けんめいくらしている生き物のくらしをぎせいにして作られたものがいっぱいなんだなぁと思いました。そんなことも知らずにむだ使いしてきた自分が、少しショックでした。作者が書いた「地球は、人間だけのものではない。」という言葉の意味が、よく分かりました。ゾウたちにとってはやさしくないポテトチップスやカップめんや洗ざいが、本当に、ぼくたちにとって必要なのか、考えていきたいです。

◇講評◇

中学年は、主人公と自分の経験を絡めながら、自分の考えや想いが素直に書かれた作品が多く見られました。
優秀賞「平和な空の下」では、本を通して知った戦争の怖さ悲しさを、自分の生活と比べ、今ある幸せを実感しながら、主題となる平和への願いがしっかりと書かれていました。
優秀賞「ぼくもお兄ちゃんになりたいな」は、主人公と同じように、妹が生まれた嬉しさと、母をとられてしまったような寂しさの間を揺れ動く気持ちを素直に書いています。家族の温かさがそのまま伝わってくる作品でした。
今年度は、自分が経験していないことは、調べたり周りの人に聞いたりしながら書いた作品や、本を通して当たり前の自分の生活を振り返り、感謝する気持ちが書かれた作品も多く、社会性が育っていると感じました。
感想文を書く上では本選びがとても重要になります。出品された作品は、自分の心を動かしたよい本を選んで書かれていました。
課題としては、本の内容と自分の経験のどちらかに偏りすぎないように、バランスよく書くことが大切だと感じました。また、原稿用紙の使い方や表記の仕方などが、間違っている作品もあり、募集要項を守った書き方の指導も合わせて行っていくことが大切だと感じました。

小学校　高学年の部

★優秀賞

「手で食べる？」文化から学んだこと

飯地小学校
五年　小澤　宙子

「あっ！手で食べていいの？」
この本の表紙は、女の子が自分の指先でご飯をつまんで口に入れている写真です。題名は『手で食べる？』。私は「まさか」という半信半ぎの気持ちで本を開きました。すると、もっとびっくりすることが書かれていました。
私と同じ小学生の子たち四人が、床にカレーライスやスパゲティのお皿を置いて、手で食べています。ふりかけご飯をかたひざ立ててスプーンで食べている子もいます。私はふだん、食事のことで家族から「ぎょうぎが悪い。」と言われることが多いので、ぎょうぎに自信がありません。それでも、さすがに手でスパゲティを食べたことはないです。良いこととも思えません。しかし、このページには、大きな文字で「おぎょうぎ、わるくなんかないよ。」と書いてあります。
また、外国人の家族が手で食事をする様子の写真が何枚もあり、「この人たちも、みんな、おぎょうぎがわるいっていうの？」という言葉がありました。私が家や学校でやったらおこられそうなことが、なぜか、この外国の人たちがやってもぎょうぎ悪く見えないし、それどころか自信満々で食べているようにさ

え見えました。読み進めていくと、手で食べるのには、食材と料理の仕方に理由があることがわかってきました。

日本のお米はもちもちしていてくっつきやすいから、はしと茶わんを持って食べます。インドのお米は細長くてさらさらだから、はしでつまみにくく、指にもつかないので手で食べるのだそうです。ヨーロッパの人たちはナイフとフォークが当たり前かと思っていたら、昔は手で食べていたことがわかりました。それが次第に食べやすいようにと、フォークを使い始めたのだそうです。では、手で食べる国がおくれているのかというと、そうではなく、手で食べることにもきちんとしたマナーがあり、食べ方に工夫があることもわかったのです。

この本は、国によって食事の仕方はちがうけど、全部意味があって奥が深く、一つもぎょうぎ悪くなんかない。「文化」なんだ。そう私に教えてくれました。

そして、私たち日本人が良くないと思う食べ方が、他の国ではふつうのことだったり、逆に外国人が日本人の食べ方を見たら「えっ?」と思うこともあるのだということは、本当に思いがけないことでした。このように、食べ方一つをとっても国によってちがうのだから、他の国の文化や考えのちがいを、自分の国の感覚だけで判断しないこと、お互いを知り、認め合うことは大事なことだということを、私はこの本から学ぶことができました。

日本人と外国人のことだけでなく、私の身の周りの人たちとの間でも同じことが言えると思います。私と考えがちがう人の意見でも、自分の思いこみや感覚で反対したりせず、相手の気もちがわかる人、わかろうとする人になりたいと思います。

★優秀賞

『じげんと私の十の約束』

串原小学校
六年　安藤　帆乃

私は前、ネコを飼っていました。「じげん」といって、私にはあまりなついていませんでしたが、大好きな家族でした。今年三月、じげんは息をひきとりました。私が、この「犬と私の十の約束」を読んだのは、そのずっと前です。その時は、「いい話だなあ。」と思っただけでしたが、それは変わりました。ある経験をはさんだ後には…。

この本は、「あかり」という少女と、その飼い犬「ソックス」の周りに起こる様々な出来事をえがいた物です。この物語のカギとなる「十の約束」というのは、「犬を飼うために守ること」と、あかりの母が決めた事です。そんな様々な出来事の中で、私が一番心に残ったのは、ソックスの最後の場面です。ソックスとあかりは、そこで、十の約束を振り返るのです。私は、ある時この場面を思い出しました。じげんが亡くなった日です。お墓にじげんをうめた時、ふと思いました。『私はじげんと約束、守れたかな。きっと、いやな思いばかりさせたんじゃない?最後までじげんは私をきらいだったのかな…。』亡くなる直前、私は現実を受け入れられず、じげんに何も言葉がかけられませんでした。

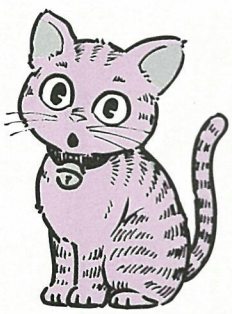
それから数週間たちました。でもやっぱり忘れることなどできません。そんな時、私は自然とこの本を手にとっていたのです。そしてあるページで、手をとめました。十こ目…最後の約束が書いてあるページです。

「私がこの世を去る時は、そばにいて見送ってください。あなたがそばにいるだけで、私は幸せに天国に旅立てるから。そして、どうか、忘れないでください。私があなたを愛していることを。」

気付くと、涙がほろほろと流れていました。『じげんも…?愛してくれた?幸せだった?』そして、心の中でつぶやきました。『じげん。ありがとう…。』

それから約五ヶ月がたちました。私は、今『サスケ』というネコを飼っています。サスケはまだ小さくて活発なので、よくひっかいてきたりします。理由もなくひっかいてきたりかみついてきたりするのがいやになって、たまに大きな声でしかってしまいます。でも、『約束、守れてない!私が気付かないだけで何か理由があるのかも…。』と思う時があります。そうすると、本当にほんの少しかもしれませんが、サスケに優しくなれるのです。

私はこの本から、『心はつながっている。でも、どれだけ相手を思えるかで、もっと変われる。』ということを学んだ気がします。正直、じげんに、「ありがとう」「ごめんね」が言えなかったのはちょっと心残りです。でも、私は、この気持ちはじげんに伝わったんじゃないかと思います。心はつながっているから。大丈夫。私はこの本のおかげで、少し前向きになれました。じげんのことを考えるきっかけも、この本が与えてくれました。あなたは守れますか。この十の約束が。



◆優良賞

ぼくは、負けない

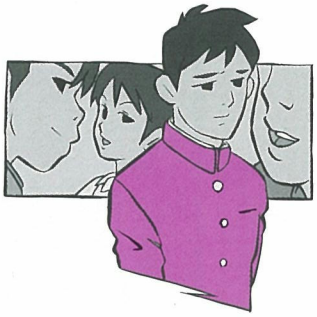
飯地小学校
六年　佐藤　辰樹

よだかは、実に醜い鳥だ。顔は味噌をつけた様、くちばしは平たくて、耳までさけている。足はよぼよぼ、一間足りとも歩けない。ほかの鳥は、よだかの顔を見ただけでいやになる…。こんなに、ここまで醜い鳥のことをぼくは見たことも聞いたこともない。そして、この醜さによって、よだかは、鳥の仲間からも散々な悪口を言われ、馬鹿にされて生きている。

でも、よだかは何も悪いことはしていない。それどころか、巣から落ちた赤ん坊のメジロを助けたりする優しい心の持ち主なのだ。だから、ぼくは、醜いというだけで、避けられ差別され、ひどい仕打ちを受けるよだかがかわいそうで、本当に、腹が立った。ぼくも背が小さいだけで、「ちび。」とか、「ちっちゃ。」とか言われ、ずい分嫌な思いをしてきたから、辛い気持ちがよく分かる。まして、名前を「市蔵」に変え、首に札をぶらさげろなどと言われたら、その十倍も百倍も悲しくて、心が折れて立ち上がれないくらいだろう。今までと今の自分を全部否定されたようで、「死んだ方がましだ。」と思うのも当たり前だ。

でも、よだかは、こんなにひどいことを言われても、抵抗すらせず、悲しい辛いと思いながら、全部あきらめて受け止めているように見える。恐ろしい鷹から、「つかみ殺す」とおどされたからだろうか。

よく考えると、それは、鷹とよだかだけのことではない。人間社会でも同じことだ。「いじめ」の問題や、国と国の戦争だって、結局は、強いものが弱いものを痛めつけ、支配しようとすることに変わりはない。それが、世の中の常識のようになっている。どうして、こうなってしまうのだろう。



でも、よだかにとって最も辛かったのは自分も鷹と同じであること、たくさんの羽虫を食べ、いやがる甲虫を無理やり飲み込み、弱い者の命を奪って生きていることに気づいたことだ。よだかがぞっとしたように、ぼくたちも、他の生き物の命を奪い、肉を食べ、野菜を育て、その命をもらって生きている。そうしなければ生きていけないから、悲しいとも何とも思わない。でも、よだかは違う。羽虫や甲虫の辛さに心を痛めてしまう。本当に優しい鳥なのだ。絶望したよだかは、殺されることも殺すこともない空の向こうにいってしまおうとする。ぼくは、はっとした。ぼくもよだかと同じじゃないか。悲しくても、おかしいと思ってもしょうがないとあきらめている。実は、よだかは、「思いっきりとぶと空が、まるで二つに割れたようだ。」というくらい強い鳥だ。それなのになぜ戦わないのか。

ぼくは、だんだんよだかと自分に腹が立ってきた。よだかは死と引きかえに空の星になってしまう。安らかかもしれないけれど悲しい。よだかは優しいと思うけど、よだかのように逃げたくはない。自然の掟はくつがえしようがないけれど、嫌なことは嫌、おかしいということはおかしいと勇気を出して言いたい。ぼくはぼくの強さを信じて、ぼくは、負けない。

◆優良賞

『カブトムシ山に帰る』を読んで

東野小学校
六年　山内　大悟

ぼくは、小さい時から虫が好きだった。特に、チョウ、クワガタムシ、カブトムシは好きで、夏休みの一研究で研究したこともある。アゲハチョウとカブトムシは、幼虫から飼育した。幼虫が葉を食べる時やサナギになる時、成虫になる時は、すごくわくわくした。

父が小さいころカブトムシをとっていた秘密の木に、連れていってもらったこともあった。でも、四年生になるとスポーツ少年団に入り活動もいそがしくなり、時間があってもゲームをしたり野球練習をしたりするようになっていた。

本屋でこの本を見つけた時、カブトムシ、久しぶりに見るなあと思って手に取った。何となくなつかしくて、この本で感想文を書くことに決めた。

この本を書いた山口進さんは、昆虫カメラマンをしている。二十年前、クワガタムシの図かんを作っている時、山で幼虫を探していると古くて固い朽ち木から小さなカブトムシの幼虫を見つけた。カブトムシの幼虫は腐葉土の中にいるはずなのにと、山口さんは、この時からずっと不思議に思っていた。

図かんができてから山口さんは、山梨県の日野春という虫の王国といわれる町に移り住んだ。この雑木林には、オオムラサキ、シロスジカミキリ、スズメガなど、ぼくの知っている虫がたくさんいた。カブトムシもすごく大きかった。

日野春は、落葉広葉樹林が多く四季があり、葉

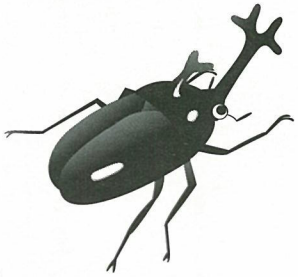
が落ちるので、堆肥作りも盛んでエサとなる樹液が出る木もたくさんあった。だからカブトムシには良い環境で、大きく育つことができた。

今から五十年ほど前までは、炊飯もだんぼうも風呂も全て、まきや炭を使っていた。だから人々は木を切り落葉で堆肥を作り、草を刈って林を手入れしていた。だから虫たちが育つ絶好の場所になった。人々は、雑木林に頼って生活していたのに生活が近代化し、林の手入れをしなくなった。すると、虫が少なくなった。

山口さんは、理由を調べるうちに三センチぐらいの小さなカブトムシを見つけた。山口さんは林を再生させる活動をした。カブトムシは増えたけど、やはり小さかった。

ぼくが一番驚いたのは、樹液の出る仕組みだった。大きい木ほど樹液が出ると思っていたし、余った養分で出来ているとは思わなかった。なぜ、カブトムシが小さくなったのか解った時も驚いた。結局、人間が虫をふり回している。ぼくは、何かで読んだ『夜に鳴くセミ』を思い出した。人が動くと自然がこわれる。でも、人が動かないことで林がこわれた。ぼくは、人間って本当に自分勝手だと思った。

それでもカブトムシはたくましく、里山が消えても生き抜いて山へ帰っていった。元いた所に戻っていった。ぼくは、申し訳ない気持ちとカブトムシの強さに対する尊敬の気持ちでいっぱいになった。



◇講評◇

高学年の作品では、動物の命がテーマとなっている本の感想文が多くみられました。これは、動物を通して自分の生活体験と本をつなげて考えることができるため、児童が書きやすかったからではないかと考えられます。また、平和やいじめなど社会的な問題をテーマとする本について書かれているものもあり、高学年らしい選書だと感じられました。

優秀賞「じげんと私の十の約束」は、動物を飼うということ、その命と向き合うということが、本を通じてよく考えられていました。命と向き合うために大切にしたいルールが丁寧に書かれていました。優秀賞「『手で食べる?』文化から学んだこと」は、食事の仕方から、様々な国の文化の違いや考え方の多様性について考え、互いの文化を知ることが、相手を知ることへの大きな一歩だということが伝わってきました。

全体的に、本の内容はとらえられていましたが、それに対しての自分の思いや考えが浅い印象がありました。また、感想文の書きぶりが似ており、パターンに沿って書かれているように感じました。今後は、これからの生涯や生き方の示唆となる本を選び、本を通して自分を振り返り、自分の思いや考えを自分の言葉で表現することで、読み手に強く伝わる文章が書けるよう、推敲の大切さや文章の書き方を指導していく必要があると感じました。

中学校の部

★優秀賞

幸せのかけら

恵那東中学校
二年　鈴木　映恵

一気に読み終えると目を閉じた。―満天の星空の下、レオのカノンロックがこだましている。天国に向かう途中のケチルも人混みから離れた木の陰で涙ぐみながら聴いている。その横でハンナさんが微笑む…。ステージから降りてきたレオに駆け寄り、肩をたたいて「レオ、やった!すごいよ!」と言う私がいる。―「星空ロック」という題名と装丁の美しさにひかれて読み始めたが、こんなに感動するとは思わなかった。いい本に出会えた。

自分のことを「ツイていない」と「なんでそうなるの?」をたして、「まあいいよ、どうせ」で割ったような人生だと言っていた、基本へたれの中学二年生のレオ。そんなレオが、遠いドイツのベルリンで、大勢の人を感動させる音楽を演奏できたのだ。短い間に驚くべき成長だ。どうしてレオはこんなに変われたのだろう。私は、その訳を知るために、もう一度じっくり読んで考えた。

レオを大きく成長させたのは、出会いであり、出会いから始まる人とのつながりだと思う。時代、国、人種、世代、それらをこえて人々はつながることができるということをあらためて知った。歳が七十以上も違うケチルとレオ。両親共に違い、元クラスメイトで兄妹のユリアンとリサ。人種、国籍が違うベアカイとアーリー、そしてレオ。ケチルとハンナさんは、時代と国、生死をもこえてつながったと言えるだろう。なんと、アー

リーの義理の祖母は、ケチルがドイツへの留学以来七十年もの間、想い続けたハンナさんだったのだ。人の出会いはまさに運命だと感じた。

人とのつながりから、レオは自分の世界観を広げる貴重な体験ができた。私も考えさせられ、もっと知りたくなった。「パッチワークファミリー」からは家族の在り方を、移民の子どもたちのためのボランティア団体（ＳＫＩ）やアルトマンのバナナ事件からは人種差別や難民問題を、「躓きの石」からはナチスドイツや戦争についてを。

多くの出会いの中でレオに最も影響を与えたのは、やはりケチルだろう。ケチルはアパートの大家で九十歳過ぎの老人だ。「世界のどこかで」を弾けるようにすることを条件に、ギターの練習に隠れ家を貸してくれた。レオに「大切なことは前へ一歩踏み出していくことだ。そうすればおまえの世界がきっと広がってくるはずだ。」と言う。カノンロックも教えてくれた。ケチルは、レオがドイツに発つ前に、七十年前からずっと変わらない想いを伝え、リンデンバウム楽器工房を訪ねてほしいと頼む。そしてクララへのプレゼントのレコードを残して亡くなってしまう。

ケチルに出会っていなかったら、レオはギターもうまくならなかっただろうし、ベルリンに行ったとしてもハンナさんに会うことはなかった。そして、ＳＫＩのバンドにも加わらず、リサやユリアンたちと音楽を通してつながることもきっとできなかった。ケチルとの出会いが、レオの人生を変えたと思う。

でもよく考えてみると、ものすごくケチで「ケチル」と呼ばれ、悪評高いいじわるじいさんと友達になれたのは、レオが一歩踏み出す勇気を出したからだ。私なら練習場を貸してやると言われても、返事もそこそこに逃げ出しただろう。ところが、つきあってみると、ケチルはまともな人で、レオの唯一の音楽仲間となる。読み進めていくうちに、私もケチルがだんだん好きになっていった。人を見た目で判断してはいけないと思った。どこに素晴らしい出会いがあるかわからない。

勇気と言えば、ドイツ語も英語も得意ではないレオが、アーリーと自然に仲良くなる場面が印象に残る。ドラムを叩くアーリーに思い切って手をあげ、ドラムに合わせてギターを弾いたことで、何も言葉を交わさなくても仲良くなれたのだ。これがきっかけで、レオやリサたちのバンドに加わり、サマーフェスティバル出演が決まる。音楽の言葉以上の力に驚いた。言葉でなくても心は通じる。

私もこの夏、大きな出会いがあった。オーストラリア研修に参加したのだ。英語に自信がなくて心配したが、お土産に持って行った紙風船で遊んだことで、ホームステイ先の子どもたちとあっという間に仲良くなれた。言葉がうまく通じなくても、何か共通の物を通じてつながることができると感じた。私は紙風船のお陰で自分から話しかける勇気が湧いて、とても充実した研修になった。

「世界のどこかで小さな幸せのかけらがきっとみつかるはずさ」、ケチルの好きな歌の通り、私の周りには小さな幸せのかけらが転がっている。それは、出会いのことだと思う。

「聴け、ケチル、ぼくの星空ロックを！」レオは幸せのかけらを自分のものにし、ケチルの最後の言葉に堂々と答えた。私の夢は、英語を使った仕事をすることだ。この先、夢につながる出会いがきっとあると思う。それを自分のものにするために、レオのように勇気を出して、前に一歩踏み出していきたい。

★優秀賞

心の声

恵那北中学校
二年　小栗ほの花

「本当に？」

自分にしか聞こえない、どこからか響いてくる心の声。どんな時も、美羽は自分に、自分の心に正直に生きている。

「それが本当の気持ち？」

と自分に問いかけながら。

中学一年生の時の美羽は、人の顔色をうかがい、いつも頑張ってにこにこしていた。そんな自分に嫌気が差しながらも、いい人だと思われたくて、嫌われたくなくて、本当の自分の気持ちは心の奥にしまいこんでいた。友達ともちゃんと向き合わず、にこにこし上辺だけで適当にその場に合わせておく。そんな生活をしていた。

私には、美羽が本当の自分を出せない気持ちがよくわかる。なぜなら、去年の私がそうだったからだ。

去年、クラスの男子が一人、他の男子から距離を置かれていたことがあった。今まで仲良くしていた男子が何らかのきっかけでその子と話さなくなったのだ。男子が二つのグループに分かれ、まるでクラスがバラバラになってしまったかのようだった。男子の変化を感じていながら、私はどうしていいかわからず何もできなかった。いや、その子が寂しそうなのを見れば、男子に注意しなければいけないことも、それが無理なら先生に相談すればいいことも分かっていた。でも、男子にどう言おう、先生に何て伝えようと考えていたら不安になってきてしまったのだ。いい子ぶってる、

お節介と思われるのではないか、嫌われはしないだろうか、そして、これは誰かに言うほどのことなのだろうか…と。嫌われるのが怖くて、理由をつけ、本当の自分の気持ちから目をそらした。そうやって生活するのは楽だった。でも、本当はこうしたいんじゃないという気持ちがずっと胸の奥でうずくまっていた。それに気づいているのに行動できない自分が情けなかった。そして二年生になっても、意見を言う時や仲間と過ごす時、いつも周りの目が気になってしまっていた。

美羽がそれまでの自分をふっ切った時、私の中でも何かがはじけた。

「あたしはあたしに正直に生きる。」

美羽の言葉が私を強く揺すぶった。心の中で自分の声がする。周りの目が何だ?そんなことを気にしていて本当に人と関わっていけるのか?嫌われたくない?本当の自分を出して嫌われるのと、人に迎合して好かれるのとではどちらに価値があるというのだ。

美羽は、孤立を覚悟で自分を変えた。一人になったとしても、正直な自分でありたいと。しかし、そんな美羽を認め、受け止めてくれる友がいた。唯は、美羽がいじめられた時も周りに流されることなく普通に口をきいた。自分がいじめられるのが怖くて美羽と目も合わせなくなった他の女子とは大違いだ。そんな唯に美羽は心の声を伝え、唯も美羽に心の声をぶつけた。本当の友達とは、こういう関係のことをいうのではないだろうか。お互い本当の自分が出せ、相手と受け止め合える関係。真剣に、相手と、そして自分と向き合うからこそ生まれる真の絆。それは決して壊れることはない。表面でなく、心の奥で結ばれた強いつながりだからだ。

本の題名でもある『クリオネのしっぽ』。

海中を優雅にただよう天使のようなクリオネは自由の象徴。でもクリオネにはしっぽはないはずだ。美羽はクリオネのしっぽをリボンでなく弓で飾ると言う。私は、始めはどういう意味かわからなかった。でも、今ならわかる。しっぽとはきっと誇りのことだ。何にもとらわれず軽やかで自由に動き回るクリオネは、小さくてもここでこうやって生きていると全身で示している。自由な自分に誇りをもって生きている。それこそが見えないしっぽだ。人間だってきっと見えないしっぽを持っている。人に安易に合わせたりせず、自分に正直に生きている時、心の声に耳を傾けて、本当の自分の気持ちで行動できている時、きっと見えないしっぽは自信に満ちあふれピンと伸びていることだろう。自分が自分自身であることへの誇り。その誇りの象徴であるしっぽ。誰でも持てるであろうしっぽ。自分に正直に生きる強さこそがその誇りの源であると私は思うのだ。

自分の本当の気持ち、心の声を大切にしたい。それは、孤立ではなく、友達との深いつながりを作り、誇りをもって生きることにつながる。これから先、どんなことが待っているのかは分からない。でも大丈夫。もし迷うことがあったなら、私は自分に問いかけるだろう。

「それが本当の気持ち?」

って。

◆優良賞

介護の大変さ

恵那西中学校
二年　曽我　柚妃

私の将来の夢は、介護士になることです。この夢を見つけたきっかけは、私の父方の祖母が介護士として働き始めたことでした。

「介護の仕事なんて大変なだけだよ。」

これは、祖母がよく私に言う言葉です。こう言われると私はいつも、

「わかってるから大丈夫。」

と答えます。

大変だと言われても、私には諦めたくない理由があります。それは、母方の祖母のことです。私の母方の祖母は、何年か前に脳梗塞で倒れました。今ではもう元気ですが、体が不自由になってしまい、人の助けがないと生活できなくなってしまいました。私は初め、そんな祖母の姿を見るのは辛いと思いました。でも一番辛いのは祖母自身だと思います。だから私は、そういう人を助けたいと思うようになりました。でも実際、私は、介護の仕事を間近で見たことがないので、介護が本当に大変なものなのかわかっていませんでした。

そんな時に本屋で見た「介護はつらいよ」という本の題名に興味を持ちました。この本を読めば、介護の大変さがわかるのではないかと思ったからです。

この本は大島一洋さんが、弟さんやケアマネージャーさん、介護士さん達の助けを借りながら両親を介護した経験をつづったものです。この本の舞台は中津川市の周辺です。だからとても身近な本だと感じました。

一洋さんのお母さんは、認知症になりました。認知症は少しずつ悪化し、最終的には一洋さんのことまで認識できなくなってしまいました。

私の周りには、認知症の人がいないので、認知症がどんなものなのか、くわしくはわかりません。だけど、お母さんに自分のことを忘れられたら辛いだろうなあと思います。

でも文章の中には、辛いとか悲しいという気持ちは書かれていませんでした。まだ中学生の私と、大人の一洋さんでは感じ方が違うのだと思います。でも、私も大人になった時に、一洋さんのように、辛いなどと感じなくなってしまったら寂しいと思いました。

私は、祖母に、介護の仕事の難しさを聞いたことがあります。祖母の答えは、認知症の人とのコミュニケーションでした。だから一洋さんも苦労したんだろうと思いました。

一洋さんは、お父さんとお母さんの介護をしているうちに、ストレスで体調を崩してしまいました。ずっと微熱が続き、朝には平熱に戻るのだそうです。だけど、地元の同級生の人達の存在が癒しになったそうです。

私のように、介護士になりたい人や、私の祖母のように、自分の意志で介護士になった人にとっては、介護は、あまりストレスにならないと思います。でも、一洋さんの場合は違います。最終的には自分で決断したことだけど、きっと、長男としての責任を感じていたんだと思います。だから、体調を崩してしまうのも仕方がないことなのかなあと思いました。

そして、二〇〇八年になる頃に、一洋さんのお母さんが危篤宣言を受けました。認知症で一洋さんを認識できなかったはずのお母さんは、亡くなる直前に「いちようはどこや。」と言いました。一洋さんは、久しぶりにお母さんに名前を呼んでもらえて嬉しかっただろうなあと思います。

その後二〇一二年には、一洋さんのお父さんが老人ホームに入居しました。その施設はとても親切でした。一洋さんのお母さんの入居した施設はサービスがあまり良くありませんでした。だからお父さんは恵まれていたと思います。でも、施設の費用はやっぱり高いので、お年寄りの方々には負担が大きいだろうなあと思います。

一洋さんは、百歳になったお父さんに対して「もういい加減にしてくれ。」と書いています。これも、一洋さんの疲れから来る心の声なんだろうなあと思います。

私は、この本を読んでみて、祖母の言葉の意味が少しわかった気がします。だけど、介護士になるという夢は、強くなりました。私一人なんかじゃ一洋さんのような人全員を救えるとは思わないけれど、少しでも多くの人の負担を減らせるように全力で働きたいと思います。そして、介護ストレスで命を絶ってしまったり、親の命を奪ってしまったりする人を少しでも減らせるような働きをしたいです。そうすることで介護をする人もされる人も救えると思っています。

この本を読んだことで介護の大変さについてわかったつもりだけど、夢を捨てようとも思わないし、むしろ決意が固まりました。だから「介護士」という目標に向かって、今できる、学校の勉強と介護についての勉強を、少しずつでもやっていこうと思えました。そして、介護士になることをゴールと思わず、それからの自分にできることを全力でやれる人になりたいです。

◆優良賞

JALから学ぶ「利他の心」

恵那西中学校
三年　西尾ひより

二〇一〇年、日本航空が会社更生法を申請。事業会社の中で、戦後最大の破綻。しかし、誰もの予想を上回るスピードで再生した。

「『一人一人がJAL』私はJALの一員だ。」

そんなことを考えながら、日本航空で働く方は、日本の空の玄関口で多くのお客様を迎えている。

空港や飛行機を利用する人は様々である。耳に障害をもち、口の動きだけを頼りに案内に従う男性。認知症を患った、おしゃべりで明るいおばあちゃん。旅行で思いっきり楽しんだ、笑顔いっぱいの子供達。仕事でパソコンとにらめっこするサラリーマン。サラリーマンであっても、田舎の父親が亡くなり、冷静になれない男性…。

お客様一人一人の望んでいることはそれぞれ違う。しかし、お客様全員の心の大空に一本の美しい虹をかけるきっかけをつくるために、JALの方は働いているのだと感じた。

二〇二〇年、夏期五輪に東京が開催地として決まった。だからこそ、私たちは、日本航空の「ホスピタリティー（心からのおもてなし）」や、日本の誇る「おもてなし」の精神を再確認する必要があること、そして、これからも大切にしていかなければならないことを考えさせられるきっかけを、私はこの本からもらった。

上野マリさん。客室乗務員。彼女は、日本航空が会社更生法を申請したその日に、飛行機で普段

通りの仕事をしようとしていた。

「素敵なブローチですね。」

と彼女はある婦人に声をかけた。すると、婦人は認知症を患っていたらしく、何度も何度も同じ話をした。でも、マリさんは、その話をあたかも初めて聞いたかのように、最後まで聞いた。なぜ、そんなことができたのか。それは、マリさんのお婆ちゃんが何度も何度も同じ話をしたとき、「その話、聞いたことある。」と答えてしまったために、悲しそうな顔にさせてしまったからである。

秋元美空さん。手荷物取扱業務。任されている仕事は、『手荷物をターンテーブルに載せること』。

しかし、秋元さんは毎日、五つのターンテーブルをモップで拭いた後、さらに雑巾を使って拭く。なぜそこまでするのか、と問われたら、

「お客様からお預かりしたお荷物を、そのままの形でお返ししたいだけです。」

と答えた…。

これら二つの事例を含めたこの本のエピソードから、どの人も、相手の立場に立って、心からのおもてなしをしていることが分かる。

それは、私が小一の頃に担任の先生から教えていただいた言葉とつながった。「自分のいやなことを友達にしない、言わない。」

私の世界はいつも学校の中だけだった。友達が楽しそうに過ごすことができたなら、私も楽しいと思っていた。でも、この本を通して、それは少し違っていることに気付いた。本当の「過ごしやすい社会、世の中」というものは、相手はもちろんのこと、自分も「うれしい」と言える社会なのだと気付いたのだ。

さらに、私は昨年、職場体験の際に動物病院で働く機会をいただいた。それまでの私の考えていた仕事とは、お金を稼ぎ、家族を養っていくためのものだった。しかし、実際は、そうではないことに気付いた。交通事故で下半身がまひしてしまい、排せつがうまくいかない猫や、病院の裏に捨てられてしまった猫を、まるで自分の子供のように大切に育てているのだ。過去に痛い思いをした動物たちに、少しでも「幸せ」を感じてもらえるように大切に育てていることを知った。

これは、ＪＡＬで働く人と共通する『おもてなしの心』であると言える。この本と出会って、相手を思いやることで、自分の喜びを見い出せることが分かった。そして、それが、明るい日常へつなぐ鍵になることを学んだ。

「私にできることは何だろう。」

私の思う喜びや楽しさを踏まえ、相手が明るくなる方法を考えてみる。

「これをしたらこの人はどう考えるのか。」

こうやって少し立ち止まって考えることがＪＡＬの理念『ホスピタリティ（心からのおもてなし）』へとつながっていくのだ。

そして、心からのおもてなしが相手に伝わることが、心の大空に一本の美しい虹をかけることへとつながるのだと思う。

『今日も笑顔で！明日も笑顔で！』

どんなに辛い時でも、どんなに悲しい時でも私とあなたで共に笑顔でいられるように。そしてその先に互いのパワーをもらえるように。そのような『利他の心』で、「おもてなし」が相手に伝わるようになるのだ。

私もあなたも同じ笑顔でいる。これが、日本が誇る「おもてなし」の精神であるのだと気付いた。

◇講評◇

1　本年度の作品のよさ

・考えを強くもったり、さらに高まっていこうという意欲をもてたりして、自分の生き方を深く見つめようとする作品が上位に入賞をした。
・登場人物と自分の経験を作品の語っているものとつなげて書くことができ、自分が読書を通してどのように変わったのかを素直に表現することができた。
・読み終えた後に感想文を書くために読み直すといったように、よく読み込んで書くことができている。
・言葉を選んだり丁寧な文字で書いたりするなど、自分の考えを相手に伝えようとする気持ちの表れた作品が多かった。
・内容に共感したり、納得したりできるような作品を見つけている。

2　今後に向けて

・本の主題から離れて、自分の体験談のみを語る、一部の脇役を取り上げる傾向がある。主題をつかみ、そのことと自分を関わらせて考えをまとめられるとよい。本のテーマをキーワードに書くことで筋が通る。
・本を読む前と読んだ後の自分の考えの変化を本の主題と関わらせて書くとよい。
・「～という人になりたい」「○○ということを大切にしたい」ということでは、もう一歩踏み込んで、「では、具体的にどのようにしていくのか」という、自分のことを書けるとよい。
・読む作品を選ぶことから始め、「この本に出会えてよかった」と思えるような作品を見つけ、深く読み込むとよい。